

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成20年5月5日発行(毎月5日1回発行)  
第48巻5月号(通巻585号)

# 風土



5

拈華微笑  
神蔵器

出光美術館 三句

西行の真筆に会ふあたたかし

ひらがなのうたくるほしき西行忌

三月の古筆手鑑「見<sup>み</sup>努<sup>ぬ</sup>世<sup>よ</sup>友<sup>とも</sup>」

水月ホテル鷗外荘 二句

ミモザ咲く「舞姫の間」にひとの声

鷗外の年譜以後咲く白椿

百千鳥一期一会の茶席かな  
ポストまで二百歩春の月育つ  
花種蒔く合掌に土着せかけて  
拈華微笑まкруきおたまじやくしかな  
啓蟄や三鬼桂郎おくれをり  
春濤の無限抱擁海苔を搔く  
西行のさくらみにゆきたまへるか

悼  
浜明史



# 竹間集

同人作品



春の風邪

代田 青鳥

雨垂れの遠退いてゆく春の風邪  
春の風邪点滴のみの治療かな  
土囊より零れし土に犬ふぐり  
春の雲慈母観音のふくよかに  
夢いくつ適へて古りし雛かな  
仰ぎつつ跨ぐ線路や春の雲  
張りつめし空の一面初ざくら

目覚し時計

関根 洋子

せせらぎは目覚し時計露のたう  
拾ひたる貝より春の珠しづく  
如月の径に迷ひし猿田彦  
瑞穂なる国の真水や紀元節  
綾取りの橋や帚や春の雪  
蒸がれひ肩肘張らぬ暮しかな  
父の忌を昨日に雨のさくらもち

一番若布

田中佐知子

天の橋立  
蕪村の松式部の松や雪しづり  
春雪の踏み固まりて磯清水  
残りたる白鳥のこゑ風に乗り  
ひと群の一羽が羽搏つ春の鴨  
香を放つ雪より摘みし露の薑  
春耕の雪を鋤き込む千枚田  
水揚の光を弾く一番若布

粥のぬくみ

南うみを

雪片のぶつかつてくる牡丹の芽  
残る雪いよいよ雨に透きとほり  
梅咲くや粥のぬくみの竹の匙  
大菱喰湖へこませて帰りけり  
蝌蚪生れて水やはらかくなりけり  
みづうみのふくらんでゐる田打かな  
粉殻の水面を走る涅槃かな

山並

島谷 征良

元朝の山並せまりきたりけり  
鳶の輪の高さかはらず去年今年  
うしろより子にのぞかるる初鏡  
一人も欠けぬ太箸並べけり  
青きもの畑より引きお正月  
義経を祀る社のどんどかな  
河豚鍋や友の変らぬ遠目癖

律の調べ

大竹淑子

春立つや掌等持院 五句にやはらかき京の雪  
尊氏の宝篋印塔春の鵙  
さへずりの短し雪の等持院  
薄氷茶室・清蓮亭 二句や手水に渡す竹青き  
佗助や部門好みの貴人床  
春深雪さんまい三昧まいに立つ木の墓標  
浅春の流れに律の調べ註(三)律は三律のついであり

暖かき色

斉藤 小夜

三畳の茶席に座すも冴え返る  
あたたかき色のスカーフ胸にあり  
町川の水の落差に春を知る  
山水を渡す竹樋春浅し  
母と子の絆は強し鳥雲に  
つくねんとひとりゐる子や梅匂ふ  
春日傘墨染尼の歩巾かな

北国旅情

— 相沢有里子 —

熊笹に見えがくれして北きつね  
冴ゆる月子と住みなれし丸木小屋  
木菟啼いて山荘の灯のとびとびに  
豪州人嬉々とホワイトクリスマス  
凍つる夜の茶房豪州訛りとぶ  
すぐ集ふ近隣冬の花火揚げ  
遠火事のなほ夜を焦がす北の町  
暮るる町雪沓の音うしろより  
豪雪ににつちもさつちもゆかぬ村  
揺り椅子や懊くづれ落つ春暖炉

山莊を根城に北へ春の旅  
啼き交はす海猫に流水かがよへり  
耳疼く円がな流水せめぐ音  
流水の町居酒屋の土間濡れて  
眼を凝らす北方領土棚霞  
潮の香や近くて遠き島おぼろ  
櫓しまふ父と子納屋を開け放ち  
白樺のひすがら雪解雫かな  
喇叭吹き移動販売かげろへり  
狂院の空のさみどり花辛夷

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

佗助や衣桁にかけて能衣裳  
奥の院までの小流れ芹育つ  
春愁や表裏確かむ和紙の耳  
海苔搔女掌に載せくるる香りかな  
信篤き母の手順に午祭

落合絹代

野火に立つ芯といふものなかりけり  
椿落つ人も今際は光り曳き  
冴返る人には人の暮しの灯  
目借時吾が養生の塩加減  
巢燕や家紋浮立つ釘隠し

天野みゆき

松過ぎの学習塾へ急ぐ子ら  
四五人の女ばかりの探梅行  
路の臺城趾にのこる啄木碑

中沢三香

退院のベッドの中の福の豆  
かたかごの花や憶良の八十をとめ

布施まさ子

柵挿す雪の雫をてのひらに  
メタセコイヤの高さに寒の明けにけり  
結び目を解きたる如し春節祭  
一の午土蔵のうしろに雪のこり  
野を焼くや削られてゆく高麗郡

森田節子

納骨や降り出す雪を肩に負ふ  
虚子庵のめばりに重ね目貼かな  
厳寒の家並寄せ合ふ漁師町  
母と聞くチゴイネルワイゼン春の風邪  
師を語る師の横顔や梅二月



◇特別作品◇(抄)

## 坂の街長崎さる

工藤はるみ

ランタンや長崎の春動き出す  
水面の揺るるランタン春の宵  
泛きあがるライトアップや春の句碑  
梅咲いて豚返してふ敷居越す  
くれなゐの竜宮門や蔦若葉  
鰯魚の一对吊られて梅真白  
料峭や媽祖行列の墨の絵図  
白梅や飢饉を救ふ粥の釜  
辛夷咲く青白き風ふくらめり  
残る鴨眼鏡橋より去りがたし

# 風土集



## 神蔵器選

五智如来梅は香りを奉る 相模原

天野みゆき

火の国の井水に塩気戻り寒

首仏を祀る一寺の冴返る

をんななくば神話なからむ椿かな

春の波蹟く鬼の洗濯板

吊橋の苔もろともに凍ててをり 川崎

中根 美保

凍滝の森の匂ひの奥にあり

風の日の続きて山の笑ひ初む

コード這ふ床剥き出しに冴返る

鉄鍋に滑るバターや鳥曇

春立つや水いつばいの壺抱へ 高槻

浅田 光代

薄氷や生れたてなる風通り

あはうみは草の色して初諸子

藍襲の藍の匂へる雪解かな

さへづりや樹々の体温上昇す

ワーズワースの丘に溢るる黄水仙 東京

奥田 茶々

税務署に春泥のあと残しけり

鉄棒に上着掛けられ下萌ゆる

はだれ雪二輛でんしやの曲がりくる

刺繍さす一針ごとの春の雪

薄氷に風が閉ぢ込められてをり さいたま

須藤美智子

浅春の命あるもの光あふ

春の月不意に泣きたくなりけり

フアツクスの字の踊りたる合格子

梅咲くや吉川英治記念館

人の名の思ひ出せざり雪解道 岡山

有元 文子

日脚伸ぶ昨年と違ふ今日がくる

春宵や鴨居に吊るす旅衣

助手席に獵犬足を揃へゆく

鶯に山の喝采ありにけり